プラトン『ポリテイア』IX.592a–b 再考

納富信留

プラトン『ポリテイア』第 9 巻の議論の締めくくりにあたる 592a5–b5 は、一見平易なやりとりながら、それ以前との関係が付けにくく、議論の筋を精確に追うことが難しい、"a curious passage"（R. L. Nettleship）である。だが、『ポリテイア』とプラトン哲学全体をどう理解するかが、この箇所の読みにかかっている。ここで語られる「天上に掲げられているモデル」には、2 つの主な解釈がある：

（一）この対話篇が示してきた理想の国家はあくまで「天上」にあり、「政治」活動は地上で行われる現実のものではありえない（「天上の国」がキリスト教の伝統で「神の国」の予示と理解された歴史的事情も関連する[*1]）。

（二）理想の国家は「魂」の内でのみ実現されるのであり、「政治」活動はそのメタファーに過ぎない。

これら 2 解釈は異なったものでありながら、哲学者が統治者となるべき「理想国家」に関して、その実現性、及び、そこでの政治活動の必要性が放棄されている、と解する点で共通している。両者は連動して、『ポリテイア』の「非政治的」解釈の基盤となっている[*2]。その誤解を退け、正しい理解の方向を提示したい[*3]。

---

*1 例えば、南原繁「基督教の「神の国」とプラトンの国家理念（一）」、『国家学会雑誌』51-1、1937 年、11–12 頁参照。南原はこの箇所を引用しつつ、「正義と愛の精神によりて結ばれる天的なる宗教的共同体」（傍点原著者）を指示するものと理解し、プラトンが「基督の降誕紀元前四百年、来るべき「神の国」と其の「正義」を予示した」と論じている。しかし、アウグスティヌス『神の国』（De civitate Dei）自体にはそのような言及が見られないことから、伝承のある時点で、プラトンの「天上の国」がストア派やキリスト教の「神の国」に重ねられたのであろう。その経緯については、今後検討していきたいが、差し当たり Shorey の注を参照：Paul Shorey, *Plato VI: Republic, II*, Loeb Classical Library, Harvard University Press, 1935, pp. 414–415, n. b.

*2 Mario Vegetti は慶應義塾大学で開催された国際プラトン学会東京大会の「ド・フォーゲル記念講演」（2010 年 8 月 2 日）で 'How and why did the *Republic* become unpolitical?' と題する基調報告を行い、20 世紀後半の Leo Strauss, Eric Voegelin から Julia Annas, Giovanni Ferrari に至る『ポリテイア』の「非政治的」解釈の流れを批判的に検討した（納富信留・田中あや訳「『国家』（ポリテイア）篇は、どのように、そしてなぜ非政治的になったのか？」、『プラトン『国家』の読み方』、国際プラトン学会編、2010 年）。Vegetti はその報告末尾で、本箇所のギリシア語を再検討し、Adam 以来の読み方が現代の「非政治的」解釈の基盤にあることを示した。すでに注釈書で発表されている彼自身の読みについては、後で検討する（注 21 参照）。『ポリテイア』篇の政治性をめぐる評価は、近年研究の争点となっている。

*3 テクストは、S. R. Slings, *Platonis Rempublicam*, recognovit brevique adnotatione critica instruxit, OCT, Oxford

592a5 (A) *Οὐκ ἄρα, ἔφη, τά γε πολιτικὰ ἐθελήσει πράττειν, ἐάνπερ τούτου κήδηται.*

(B) *Νὴ τὸν κύνα, ἦν δ' ἐγώ, ἔν γε τῇ ἑαυτοῦ πόλει καὶ μάλα, οὐ μέντοι ἴσως ἔν γε τῇ πατρίδι, ἐὰν μὴ θεία τις συμβῇ τύχη.*

(C) *Μανθάνω, ἔφη· ἐν ᾗ νῦν διήλθομεν οἰκίζοντες πόλει λέγεις,*

a10 *τῇ ἐν λόγοις κειμένῃ, ἐπεὶ γῆς γε οὐδαμοῦ οἶμαι αὐτὴν εἶναι.*

b1 (D) *Ἀλλ', ἦν δ' ἐγώ, ἐν οὐρανῷ ἴσως παράδειγμα ἀνάκειται τῷ βουλομένῳ ὁρᾶν καὶ ὁρῶντι ἑαυτὸν κατοικίζειν.* (E) *διαφέρει δὲ οὐδὲν εἴτε που ἔστιν εἴτε ἔσται·* (F) *τὰ γὰρ ταύτης μόνης ἂν πράξειεν, ἄλλης δὲ οὐδεμιᾶς.*

b5 (G) *Εἰκός γ', ἔφη.*

a5 *ἐθελήσειν* D a7 *κύνα* A: *δία* DF *καὶ μάλα* tribuunt Glauconi ADF
a8 *ξυμβῇ* ADF a10 *ἐπεὶ* AD: *ἐπὶ* F (*ἐπεὶ ἐπὶ* Slings) b1 *ἔγωγ'* Apc[sl]
b2 *ἑαυτὸν* ⟨*αὐτόσε*⟩ H. Richards b3 *εἴτ' ἔσται* F b5 *γ'* om. F

⟨試訳⟩

(A)「いや、その人は、このことを配慮する以上は、少なくともポリスに関する事柄を実践しようとはしないでしょう。」と彼は言った。

(B)「犬にかけて、少なくとも自身のポリスにおいては大いに（実践しようと）するだろう。しかしながら、父なるポリスにおいてはおそらくしないのだ。もし何か神的な偶然が来らない限りは。」と私は言った。

(C)「分かりました。今私たちが建設し詳述してきたポリス、つまり、言論において設置してきたポリスにおいてならと、あなたはおっしゃっているのですね。というのは、それは地上のどこにもないと、私は思いますので。」と彼は言った。

(D)「いや、おそらく、天空にモデルとして掲げられているのだ。それを見ようとし、見ながら自身を住まわせようと望む者には。(E) だが、それがどこかにあるか、将来実現するかは、重要ではない。(F) このポリスのことだけを実践するのであり、他のどのポリスのことでもないのだから。」と私は言った。

(G)「おそらく。」と彼は言った。

University Press, 2003 に依拠するが、A, D, F 写本の画像を確認して、異読情報を補った。(A)–(G) の区分は、以下の検討の便宜で付している。

〈検討〉

(文脈)

第 9 巻に至って、当初の目標であった「不正な人は不幸である」ことの証明がなされ、そのような人の魂の構造が明らかにされる。591c1–592a4 では締めくくりに、「理性ある人」が心がけるべき 4 点が挙げられる。それらは、(i) 学識の尊重、(ii) 身体の健全さ、(iii) 金銭の理性的な獲得、(iv) 名誉の享受、である。自身（魂）の内に築いたポリテイア（正しいポリスのあり方）を維持するために、それを妨げるような名誉には「公的にも私的にも」与らないように、とソクラテスが語ると、グラウコンは引用部冒頭の発言を行う。

(A: 592a5–6)

この文は、「理性ある人」（*ὁ νοῦν ἔχων*, 591c1）を主語に受ける。それは、魂の理知的な部分が欲望をコントロールしている「自由人」である限りで「哲学者」に近い人と言ってよいが、哲学者その人ではない。守護者階級は財産の私有は行わなかったはずだからである。また、配慮する「このこと」（*τούτου*, 592a6）は、文脈的に (i) から (iv) までの一連の注意点を受けると考えるべきである。これらは、第 4 巻 443e3–6 での「正義」のあり方におおよそ対応するが、そこでは「政治のこと」（*πολιτικόν*, 443e4）も必要があれば行うことが言明されていた*4。

「ポリスに関する事柄＝政治」（*τὰ πολιτικά*）という話題は、第 9 巻ではここで唐突に登場している*5。理性ある人は魂の秩序を損なうような公的な名誉は避けるべきだ、というソクラテスの発言に、グラウコンは敏感に反応してこの語を発した。現実の劣悪な社会や政治では「名誉」が善き人を損なうことはほぼ不可避である。従って、「公的に名誉を受けない」必要から「政治に関わらない」という推論が自然に導かれたのであろう。ここには、（ソクラテスその人のように）内面がいくら正しくてもポリスにおいて不正の汚名を帰されて最悪の被害を被ることがある、というグラウコンの当初からの問題意識が反映している（cf. II.361e4–362a2）。彼は一連の議論を、魂の秩序が整った「正しい人」でもポリスで幸福に過ごすためには政治から身を引いて私的に生きるべきだ、という意味で受け取っていることが分かる*6。

---

*4 第 4 巻では、金銭の獲得、身体の世話、政治のこと、私的取引の 4 点が挙げられていた。

*5 形容詞 "*πολιτικός*" は、第 8 巻以降では 558b6（民主制について）とここだけで用いられており、僭主の生を哲学者の生を「幸／不幸」で対比させる一連の議論では、哲学者の政治参加は明示的な話題になっていなかった。

*6 White は VI.496a–497a に言及して、哲学者となるためには現実の政治状況では静穏な隠遁生活を送る必要がある、という意味に理解している：Nicholas White, *A Companion to Plato's Republic*, Hackett, 1979, p. 243. しかし、堕落は必然的ではなく、政治との関わりを否定することは第 6 巻の趣旨ではなかった。また、ソ

「しようとはしない」（*οὐκ ἐθελήσει*）という表現は「進んでは行わない」の意味であり、実践の全否定ではない。しかしソクラテスは、「哲学者が政治を行わない限り、人類の悪がなくなることはない」と明言していた（V.473c11–e4, VI.499b1–c1）。また、第9巻までの僭主と王者の対比も、哲学者の政治参加を含意していたかもしれない。もっとも不正でもっとも不幸な人間とは、僭主的な魂を持ちながら実際の僭主になった者であると結論づけられた時、それとの対極で、もっとも正しくもっとも幸せな人間が「もっとも王者的で、自身を王者として統治する」（580c2–3）と語られていた[*7]。この人物が実際のポリスで支配者として政治を行う者であれば、「理性ある人は、政治をできるだけ避けるべき」というグラウコンの (A) の主張は、ソクラテスのその議論を基本的に受け入れていないことになる。

(B: 592a7–8)

これに対してソクラテスは、「犬にかけて」（F、D 写本では「ゼウスにかけて」）という強調で否定を述べる[*8]。だが、彼が肯定／否定する「自身のポリス／父なるポリス」の対比は、それほど明瞭ではない。

まず、理性ある人が政治を行うとされる「自身のポリス」（*τῇ ἑαυτοῦ πόλει*）は、通常「自身に相応しいポリス」、即ち「彼の魂と同型の善きあり方をするポリス」の意味に解されている[*9]。第6巻では、哲学者が最大のことを成し遂げるには、「彼の住むポリスのあり方が、自身の素質に適合したもの」（497a3–4）である必要が語られていた。「自分に相応しいポリテイア（*πολιτείας προσηκούσης*）において、彼自身もっとも成長するだろうし、私的なことと共に、公的なことも救済する」（497a4–5）[*10]。注釈者たちは、そういったポリスがここで言及されていると解している。しかし、「自身のポリス」という表現にはそれ以上の含意があるかもしれない。第6巻の箇所では、「ちょうど彼の性格が最善である

クラテスは 497a3–4 で、隠遁的な生き方は最大事ではないと明言し、「自分に相応しいポリテイア」における公共事の必要性も強調している。政治を回避する「静寂主義」（quietism）をグラウコンに見るのは、G. R. F. Ferrari, *City and Soul in Plato's Republic*, Academia Verlag, 2003, ch. 1 である。荻原理「ジョヴァンニ・フェラーリの『ポリテイア』解釈の一端」、『理想』686、2011 年も参照。

*7 栗原裕次「不幸をめぐる〈生の判定〉——プラトン『ポリテイア』第九巻の「真の僭主」について——」、『理想』686、2011 年、66–68 頁参照。但し、私は、哲学者にとって「政治」はポリス全体の配慮であり、栗原が論じる「公的生活」より強い意味をもつと考える。

*8 "*νὴ τὸν κύνα*" という誓いは、グラウコンの誤解に対するソクラテスの強い反応とされる：B. Jowett & L. Campbell, *Plato's Republic*, Vol. III. Notes, Clarendon Press, 1894, p. 438.

*9 この表現は、"in his own city" (P. Shorey), "in his own kind of city" (G. M. A. Grube–C. D. C. Reeve), "sa propre cité" (G. Leroux), "nella città che gli è propria" (M. Vegetti) と訳されている。

*10 Cf. J. Adam, *The Republic of Plato*, vol. II, Cambridge University Press, 1902/1963², p. 369.

ような、そのような最善のポリテイアを手に入れれば（λήψεται）」（497b7–c1）とも語られていた。そこから、「自身が手に入れたポリス」、つまり「自身が建設した最善のポリス」という意味を読みこむことも可能であろう。

第 9 巻の当該箇所の前では、「魂」を理想のポリテイアにならって形づくるべきことが語られていた*11。そこで「内なるポリテイア」は魂の秩序を指していたが、592a7 の「自身のポリス」を「魂」と解することは、(A) から (C) にわたる文脈にはそぐわない。ここで「ポリス」は比喩ではなく、あくまで実際の政治体、つまり地上のポリスでなければならない。(D) については、後で検討する。

他方、「父なるポリス」という表現は、唐突ではあるが、その人の生まれ育った祖国を指すことに異論は見られない*12。しかし、「もし何か神的な偶然が来らない限りは」という条件で、そこで政治関与を可能にするような善き環境が整う必要が示唆されていることも忘れてはならない*13。

(C: 592a9–10)

グラウコンは本当に「分かっている」のか？ ソクラテスが語る選択肢「自身のポリス／父なるポリス」がどちらも地上のポリスであるのに対して、グラウコンは再びそれとは異なる見解を示す。彼によれば、「自身のポリス」とは「言論において設置してきたポリス」のことである。というのは、それは「地上のどこにもない」理想、つまり架空の絵空事に過ぎないからである。「どこにもない」（οὐδαμοῦ εἶναι）という否定は、現時点で世界のどこにもないという意味ではなく（それは言うまでもない）、端的な非存在、つまり「けっしてない」という表現である（cf. *Phd.* 70a2–3）。「地上の」（γῆς）という限定で、グラウコンは「言論における」（ἐν λόγοις）との対比を考えており、時間の条件を付ければ現実に地上のどこかで生じるもの、と考えてはいない。

これは、理想のポリスの地上性と実現性を否定する考え方である。第 2 巻以来ソクラテ

*11 直前では「自身の内にあるポリテイア」（τὴν ἐν αὑτῷ πολιτείαν, 591e1）という表現が出ており、それは「私たちがちょうどポリスにおいて為したように、彼らの内にポリテイアを打ち立てるまでは」（ἕως ἂν ἐν αὐτοῖς ὥσπερ ἐν πόλει πολιτείαν καταστήσωμεν, 590e3–591a1）を受けて、「魂のあり方」を指していた（他に、X.605b6, 608b1 参照）。"πολιτεία" の語は、第 9 巻では 591a1, e1 の 2 カ所でしか用いられない。納富信留「「ポリテイア」とは何か？」、『理想』686、2011 年参照。

*12 "πατρίς" という語は、この箇所と 575d4, 6（僭主が父なる・母なる国を折檻する）にだけ登場する。そこで「父」は家族の比喩であり、通常の「祖国」という意味ではない。またその文脈も、僭主が発生する言論考察上のポリスの話であり、この箇所での「祖国＝アテナイ」という含意とは異なっている。この新しい表現の背景に、ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』第 2 巻 3.7 のアナクサゴラスの逸話が連想されていたかもしれない；cf. Adam, *op. cit.*, p. 369.

*13 神の恩恵という条件は、VI.492e5–493a2 でも付されている。

スやグラウコンらが言論によって構築してきたポリスは、確かに思考上「最善」という意味で理想的である。だが、ソクラテスはその実現可能性も強く主張していた。「現時点で」という限定的な非実在性であれば誰も否定はしないが、ソクラテスは第6巻498d3以降で「全時間」(*τὸν ἅπαντα χρόνον*, 498d7)のスパンにおいて考えるように促し、哲人統治が「実際に不可能である、とする論拠はまったくない」(499c2–3)と断言していた。第6巻ではむしろ、それまで論じてきたようなポリスが地上のどこかで実現可能であると結論づけていた(499c7–d6)。それに対して、(C)「地上のどこにもない」とあえて発言するグラウコンは、その結論をソクラテスと共有していなかったのである。

(D: 592b1–2)

ソクラテスは不思議なことに、グラウコンの(C)の発言をすぐに否定はしない。代わりに、「言論によって設置したポリス」は「モデルとして天空に掲げられている」と言う。その意味を部分ごとに解釈していこう。

(D-1)「天空に」

まず、"*οὐρανός*"は何を意味するのか? この語には、(a)実際の天空(天体)、(b)死後の魂が住まう天上、(c)魂の中の理想界、の3つの可能性が考えられる。Jowett & Campbellはこの箇所を天体の動きとは無関係とし、「天」とは個人の内にある理想のものであるという(c)の立場をとっている*14。これに対してCornfordは"in the heavens"と訳して、(a)「天体の秩序」を理解し、(b)キリスト教の「天」(in heaven)ではないと論じている。Burnyeatはそれを踏襲し、『ティマイオス』47cとの対応を指摘する*15。だが、この問題を考えるには、他の対話篇での"*οὐρανός*"という語の用法も見ておく必要がある。

『パイドロス』のミュートスでは、魂が経めぐるのが「天」(*οὐρανός*)であり、そこはゼウスが翼ある馬車を進めて万物を秩序づける場である(246b7, e4)。神々の行進がなされる行路は「天空の内側に」(*ἐντὸς οὐρανοῦ*)あり(247a5)、その饗宴に参加するには「天空下のドーム」(*τὴν ὑπουράνιον ἀψῖδα*)の頂点にまで登っていく必要がある(247a8–b1)。

> 「不死と呼ばれる魂は、頂点にまで登りつめると、外に進み出て、天空の背後の上に立つ。天球の回転運動がそこに立った魂を載せてめぐり運び、魂は天の外の事

*14 Jowett & Campbell, *op. cit.*, pp. 438–439.

*15 F. M. Cornford, *The Republic of Plato*, Oxford University Press, 1941, pp. 319–320; M. F. Burnyeat, 'Plato', Master-Mind Lecture, *Proceedings of the British Academy* 111, 2001, p. 9; cf. J.-F. Pradeau, *Plato and the City*, translated by J. Lloyd, University of Exeter Press, 2002, p. 68, n. 93.

物を観照する。」(*αἱ μὲν γὰρ ἀθάνατοι καλούμεναι, ἡνίκ' ἂν πρὸς ἄκρῳ γένωνται, ἔξω πορευθεῖσαι ἔστησαν ἐπὶ τῷ τοῦ οὐρανοῦ νώτῳ, στάσας δὲ αὐτὰς περιάγει ἡ περιφορά, αἱ δὲ θεωροῦσι τὰ ἔξω τοῦ οὐρανοῦ.*) (247b6–c2)

この叙述からは、神々や魂たちが行進するのが (a) 天の領域であり（実際の天体運行にあたる)、その外側にある「天の彼方の場」(*τὸν ὑπερουράνιον τόπον*, 247c3) が真実在、即ちイデアの領域であることが分かる。魂はイデアの観照を終えると、「天空の内側」(*τὸ εἴσω τοῦ οὐρανοῦ*, 247e4) へと戻ってくるのである。

『パイドロス』ではまた、裁きにかけられた死後の魂が、地下で罰を受けるか、あるいは「天上で相応しい生を送る」とされる (249a7–b1)。そこは、(b) 死後の魂の居所としての「天」であり、『ポリテイア』の「エルのミュートス」でも同様に、死後の魂が送られる一方の場として叙述されている (X.614b8–615a4, 619c6–e5)。それは両対話篇で、「天体」という意味も担っている (cf. 616b2–617d1)。

『ポリテイア』で語られる「太陽」は、私たちの世界の天体であると同時に、「善のイデアの子」として類比的な意味を持つ。真実在の世界への関わりにおいて、天文学は天空の星々の運行を「目に見えない存在を目ざして学ぶためにモデルとして用いるべき」(*τῇ περὶ τὸν οὐρανὸν ποικιλίᾳ παραδείγμασι χρηστέον τῆς πρὸς ἐκεῖνα μαθήσεως ἕνεκα*, VII.529d7–8) とされる*16。ここで天空は知性対象のモデル（模型）の役割を果たし、それを見ることでイデア的数学秩序そのものが認識されるのである。

他方、問題の『ティマイオス』46b2–c4 の箇所では、神が人間のために「視覚」を与えた意味を、「天空の理性の循環運動」を観察し、それを模倣（ミーメーシス）するためであると説明している*17。ここで「天空」にあるのは、天体の秩序・回転運動である。それをモデルとして見ながら模倣し、自らの理性の動きを形づくることが語られる。無論それは「ポリス」ではない。また、魂全体の秩序というより「理性」の正しいあり方を作るため

*16 「太陽の比喩」で "*τίνα τῶν ἐν οὐρανῷ θεῶν*" (VI.508a4) と言及されるのは「太陽」であり、「洞窟の比喩」では、洞窟から出た者が "*τὰ ἐν τῷ οὐρανῷ καὶ αὐτὸν τὸν οὐρανὸν*" (VII.516a8–9) を見ることになる。数学的天文学の説明では、"*τὰ ἐν τῷ οὐρανῷ ποικίλματα*" (529c6) は空にある星々をさすが、本来の天文学はその視覚像に関わるべきではないとされる (530b7)。

*17 「我々が、天空にある理性の循環運動を観察して (*τὰς ἐν οὐρανῷ τοῦ νοῦ κατιδόντες περιόδους*)、この乱れなき天空の循環運動を、それとは同族であるが乱れた状態にある、我々の思考の回転運動のために役立てるようにということである。そして、天空の循環運動を十分に学んだ、自然本来に即した正しい理性的推論の仕方を我々が身につけ、こうしてどのようにしても彷徨することのない神の循環運動を模倣することによって (*μιμούμενοι τὰς τοῦ θεοῦ πάντως ἀπλανεῖς οὔσας*)、我々のうちの彷徨した状態にある回転運動を、正常なものに立て直すようにである。」(47b6–c4)。『ティマイオス』における天文学の意義強調は、『ポリテイア』第 7 巻の批判と齟齬するかのように読まれることがあるが、後者は現行の天文学の不十分さ、誤りの指摘に重点を置いているだけで、方向性に違いはない。

とされる点で、『ポリテイア』とは若干異なる。しかし、『ティマイオス』が対話設定上何らか『ポリテイア』をひき継いでいる以上、第9巻にその宇宙論への言及を見ることは自然であろう。『パイドロス』で神々と魂の飛翔がなされるとされる「天空」も、比喩ではなく、トポロジカルに宇宙論の天体を指すものであった。ソクラテスが(D-1)で語る「天空」も、まずは(a)天体の意味で理解されるべきである。

グラウコンが「地上のどこにもない」と実在性を否定した言論上の理想ポリスのあり方は、現に私たちが見上げる天空に確かに実際に存在している。ソクラテスのこの発言は、それを架空で絵空事とするグラウコンの誤解を退けるのに十分である。理想ポリスの実在性・実現可能性は、あるべき秩序として、より広い宇宙論の文脈に位置づけられ、確保されている。では、理想ポリスの地上での実現性についてはどうか？

(D-2)「モデルとして掲げられている」

"ἀνάκειται"（掲げられている）という語は、神殿に像などの奉納をする場合に用いられる動詞である。神像という現実の対象をつうじて、像ではない「神そのもの」に向けて祈りがなされる。言葉で制作された「最善のポリス」は、それ自体が不可視のイデアではないが、天体秩序として見られることで、「正しいあり方」を観照するためのモデルとして意味をもつ。「モデル」はまた、見られることで制作の見本となる。

モデルを観るというモチーフは、第6巻500b8–501c8で、哲学者がイデアを観照しつつそれをモデルにして「自身」と「ポリス」を制作する場面に登場していた。そこでは「神的モデル」（τῷ θείῳ παραδείγματι, 500e2）という語が、画家の比喩において語られていた。

(D-3)「それを見ようとし、見ながら……の者に」

最善のポリスは天空に「モデル」として、「見ようと望む者に」置かれている。モデルを見る目的は、それに合わせて何かを制作するためであろう。ここに「制作」という言い方は現れないが、第6巻での哲学者による「自身」と「ポリス」の制作を受けるものと考えるのが自然であろう。

"τῷ βουλομένῳ ὁρᾶν καὶ ὁρῶντι ἑαυτὸν κατοικίζειν" の部分は、写本伝承上は異論がないが、ギリシア語としては読みにくい。ほぼすべての注釈者が全体を一つの与格と見なして上記のように訳しているが、文法的には、従来とは別の読みを探る余地があるかもしれない[*18]。

[*18] 例えば、"τῷ βουλομένῳ" だけを「望む者には」とし、不定詞 "ὁρᾶν" を「見るための」として "παράδειγμα ἀνάκειται" にかけることが可能かもしれない。意訳であるが、I. A. Richards, *The Republic of Plato*, a version in simplified English, W. W. Norton, 1942, p. 172 の訳がこれに近い："maybe its pattern is already there in

(D-4)「自身を住まわせようとする」

ここでは "ἑαυτὸν κατοικίζειν" という表現が難解であるが、注釈者たちは先行訳にならって、改めて検討することなくその意味を理解してきた（と思ってきた）。この句には、次の 2 つの解釈がある（II' は II に準ずる）。

(I)「そこに住まう」："set his own house in order / take up his abode there" (B. Jowett), "constitute himself its citizen" (P. Shorey)*19, "make himself its citizen" (G. M. A. Grube–C. D. C. Reeve, I. A. Richards), "insediarvi sestesso" (M. Vegetti)*20；

(II)「自身の内にポリスを作る」："found a city in himself" (J. Adam, A. D. Lindsay, T. Griffith–G. R. F. Ferrari; cf. F. M. Cornford), "found a city within himself" (A. Bloom; cf. S. Rosen), "found it in their own hearts" (H. D. P. Lee)、「自分のうちに建設する」（山本光雄）、「自分自身の内に国家を建設する」（藤沢令夫）；

(II')「自身を形づくる」："sich selbst begründen" (C. E. Ch. Schneider), "organize himself" (J. L. Davies & D. J. Vaughan), "régler sur lui son gouvernement" (É. Chambry).

この箇所を本格的に再検討したのは、Vegetti の注釈である。彼は、現代のほとんどの翻訳者が Adam の説明をそのままに受け入れて (II)「自身の魂を整える」の意味に解しているのに対して、そう読む根拠がないことを指摘した*21。Vegetti 自身は、Adam 以前からの読み (I) を採用して、問題が解決されたと考えている。しかし、私はまだ不十分と考える。

まず、"κατοικίζειν" という動詞の用法を LSJ で確認しておこう。大きく 4 つある。

[1]「～を……に（εἰς）置く」(settle, establish, place)

[2] Acc. loc を伴い「～に入植する、植民する」(colonize, people a place)

[3] 中動態「自身を確立する、住まう」(establish oneself, settle), Th. 2.102, Isoc. 19.23, 24.

---

heaven for him to see who so desire; and, seeing it, he makes himself its citizen". その場合 "ἑαυτὸν κατοικίζειν" の処理が難しいが、同様に主動詞にかける不定詞として「(見て) 自身を建設するための」といった意味に取れるかもしれない。また、"ἑαυτὸν" を "κατοικίζειν" の目的語ではなく、意味上の主語とする解釈の可能性も検討に値する。ただ、現時点ではそれらを積極的に採用する証拠が見つかっておらず、従来の読み方が無難に見える。

*19 Lear も "constitute himself its citizen" という (I) の訳で "externalization" を論じている：J. Lear, 'Inside and Outside the *Republic*', *Phronesis* 37, 1992, pp. 191–192.

*20 Waterfield は、おそらく (I) の立場から奇妙な意訳を与えている："for those who desire to see it and, through seeing it, to return from exile", Robin Waterfield, *Plato, Republic*, a new translation, Oxford University Press, 1993, p. 343. これは、自身を天上に住まわせるという状態を「墜落した魂の帰郷」とでも解しているのであろうか。だが、この根拠のない訳文は普及版として引用され、すでに一般に誤解を与えている；e.g. Simon Blackburn, *Plato's Republic, A Biography*, Atlantic Books, London, 2006, p. 147（木田元による邦訳、ポプラ社、2007 年、209 頁）。

*21 Mario Vegetti, *La Repubblia* VI, Bibliopolis, 2005, pp. 132–133, 156–162；注 2 言及論文、14–15 頁参照。

[4]「住居に復帰する」(bring home and re-establish there, restore to one's country), A. *Eu.* 756, Pl. *Ep.* 357b.

『ポリテイア』第 8 巻 557d7 では、民主制国家では好きなタイプの国制を選んで「国家建設をする」(*κατοικίζειν*) ことが語られ、"*πόλιν κατασκευάζειν*" (d3) と同義となっている。ポリス建設を論じる第 2 巻 370e5 の箇所を、LSJ は [1] の用例に挙げている (*κ. πόλιν εἰς τόπον*, place it)*22。

私たちの箇所では、動詞の能動態が対格で直接目的語 "*ἑαυτόν*" をとっているが、(II) の意味であれば中動態の [3] にあたり、(I) であれば [1] のうち場所の要素を欠いた形と見なされよう。(I) の立場をとる Jowett & Campbell は動詞に "*ἐκεῖ*" を補って解釈しており、また H. Richards による "*αὐτόσε*" という補いも同様の構文理解を前提している。この解釈に対して Adam は、魂が天上のモデルに住まうことはできず、モデルは魂によって見られる対象であるという難点を指摘している*23。確かに、「住まう」場所については、そのまま「天空」とすることは難しい。

他方で、Adam が導入した (II) の解釈は、「ポリスを建設するように自己自身を建設する」という、魂の秩序付けを理解する*24。Adam は、天空のポリスを母市として魂に植民市を作るイメージを提案している。

Vegetti が Adam 解釈を批判して復活させようとする (I) は、自身を住まわせる場所として「そこで=天空で」を補うとするが、(I) (II) どちらの場合でも「政治を行う」ということが実質的な意味を失ってしまう。実際、Ferrari は (II) の読みに則って、この箇所を「哲人統治者」への言及ではなく、プラトン自身による読者に向けてのアドバイスと解している*25。そうして『ポリテイア』の政治性を割り引く解釈が、この箇所を典拠に成立する。(I) と (II) の解釈は、本論文の最初で紹介した (一) と (二) の「非政治的」解釈に対応している。

これに対して、既に (D-2) と (D-3) で示唆したように、私はこの箇所が「制作」を論じる第 6 巻 500b8–501c8 を受けて語られていると解釈する。そこでは、哲学者が恒常不変の真実在 (イデア) を見やり、それをモデルにして、まず (i)「自身を形づくり」、次いで (ii)「ポリテイアの下書き」を描くという国家建設が語られていた。もし "*ἑαυτὸν κατοικίζειν*" を (II) の意味で解すると、(i) 個人の魂の形成だけが問題となり、(ii) ポリスでの政治実現

*22 他に、IV.433a2 (ポリス建設), VIII.543b2 (兵士たちを住居に住まわせる), IX.579a5 (神が人々を周りに住まわせる), cf. V.453b3 (名詞：国家建設)。

*23 Cf. Adam, *op. cit.*, p. 370.

*24 Cf. N. P. White, "establishing the governance of his own soul".

*25 Cf. Ferrari, *op. cit.*, pp. 104–109.

という側面が抜け落ちることになる。しかし、第 6 巻の画家＝哲学者が「神的なモデル」に目をやりながら制作するように、第 9 巻でも「天空に掲げられたポリス」（イデアではないが理想的）を見ながら制作を行うことが含意されているとすると、その制作物は「魂＝自己」と「ポリス」の両者であろう。第 9 巻では「自己自身をポリスとして形づくる」ことが語られていたが（590e3–591a1, cf. 591e1, 592a1–4）、他方で、地上にその似像としてのポリスを建設することで「自己をそこに住まわせる」のであれば、哲人統治の理想を十分に言い表していることになる。すると、問題の表現 (D) は「天空のモデルを見て、それに倣って建設する地上の理想ポリスに、自己を住まわせる」という意味に理解できる。そこで政治を行うポリスこそ、(B)「自身のポリス＝自身に相応しい理想のポリス」に他ならない。

(E–G: 592b2–5)

(D) の箇所に「地上の理想ポリス」という要素を読み込んで理解することは、一見困難に思われるかもしれない。しかし、(E) の主語「それ」と、それを受けている (F) の「このポリス」は、明らかに地上のポリスを指している。「それがどこかにあるか、将来実現するかは、重要ではない」という文の主語は、天空のものではないからである（天空のポリスは常にある）。(E) の文の主語は前文から補われるべきであるが、“ἑαυτὸν κατοικίζειν” を (I) と (II) のどちらに解釈してもこの主語は補えない。「理性ある人」がそこで政治を行うのが、(II) の場合は「自身の内なるポリス」、即ち「魂」であることになり、また (I) の場合、「天上のポリス」になる。だが、どちらもまったく意味をなさない。この文の主語は明らかに地上の理想ポリスであり、天上にモデルがある限りそれがいつでも実現可能であるという意味で、「それがどこかにあるか、将来実現するかは、重要ではない」と語られているのである。

(F) についても、魂の内や天上で「ポリスのことを実践する」ことはできず、また、グラウコンが言っていた「言論において設置してきたポリス」（a9–10）で政治をすることも、比喩以外の意味を持たない[*26]。他方で、天空のモデルである「ポリス＝天体」を見ながら地上に正しいポリスを実現させる、という意味が読み込めるとすると、そのような理想的なポリスにおいて政治を行うという主張は理解可能であり、ソクラテスのこれまでの立場に相応しい。

(F)「このポリスのことだけを実践するのであり、他のどのポリスのことでもないのだか

[*26] もしアナクサゴラス逸話が考えられているとすると（注 12 参照）、「政治的実践」とは天文学等の観照的学問を意味することになるが、やはり「政治」は比喩に過ぎなくなる。

ら」というソクラテスの発言を文字通りにとると、哲学者は理想的な政治活動を行うために、逆に、その活動の場としての理想国家の建設に努力する、という含意が読み取れる。それこそが、ソクラテスの「哲人統治」の提案に適う解釈となる。

グラウコンがこれに対して、(G)「おそらく」(εἰκός γε, 592b5) と返事をした時、彼はソクラテスの真意を最終的に理解して受け入れたのであろうか？

このようにグラウコンとソクラテスのやりとりを追うと、2人の基本的なスタンスの違いが議論のズレを生んでおり、ソクラテスはグラウコンの意見を正すことで、理性的な人間である哲学者が政治を実現していく、という基本主張を確保していることが分かる。このズレを理解しない現代の解釈者たちは、グラウコンと同様に、理想国家論をメタファーとして、「非政治化」して捉えてしまったのである[*27]。

(慶應義塾大学)

[*27] 本論文は著者が代表を務める科研費プロジェクト検討会、及び、2010年10月16日に京都大学で開催されたフィロロギカ研究会で発表した内容に手を加えたものである。その折にコメントいただいた多くの方々、並びに、本誌査読者に感謝申し上げたい。なお不十分な点の責任は著者にある。